





**手入れが行き届き管理された森林**  
管理された森林は、間伐されていたり、落ち葉や折れた木はまとめられ、遊歩道沿いにきれいに並べられていたりします。また、新しい苗木を間隔を開けて植え、育てています。



**荒廃した森林**  
荒廃した森林は、樹木が密集して林床が暗くなったり、倒木などが多く管理がしにくくなっていたり、表土が流失して土壌が露出したりしています。



**管理不足が及ぼす影響**  
森林の機能が低下  
人工林の管理が不足してしまうと、樹木が過密化して林内が暗くなり、他の植物が育たなくなってしまう。そして、生物種が減少するだけ

**日本の41%の森林は人が手を加えた「人工林」**

森林には「天然林」と「人工林」があります。天然林は自然に芽生えた樹木が育つてできた森林で、人工林は人が苗木を植え、手入れをして作られた森林のことです。日本の森林はもともと、カシやシイなどの広葉樹の「天然林」が多かったのですが、戦後の復興などで木材の需要が急増した結果、現在ではスギやヒノキなどの「人工林」が41%もあります。

**「高齢化」に「価値の低下」森林をとりまく課題**

現在、日本の森林はかつてないほどに充実していませんが、林業従事者の高齢化などで、森林の管理が適切に行われていないことが全国的な課題になっていきます。また、戦後のエネルギー革命によって、薪や炭の利用が激減したことなどで、所有者にとって森林の価値が低下してしまい、所有者が分からない森林が増えていることも問題になっています。

**福津市の現状**  
自治体が私有林の経営管理を行う仕組みが始まりました。これに伴い、今年度からは森林環境譲与税の財源となる「森林環境税」の課税が始まっています。

**福津の総面積の28%は森林 手入れ不足の森林が増加**

福津市は総面積5276ヘクタールのうち、森林面積は1492ヘクタールで総面積の28%を占めています。そのうち、人工林は685ヘクタールを占め、全体の46%となっています。福津市では林業が行われていないこともあり、間伐などの手入れが不足している森林が増えています。

**管理不足が招く「竹害」 私たちの暮らしにも悪影響**

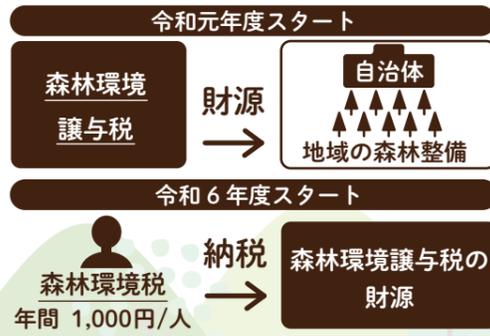
でなく、下草や落ち葉の層が貧弱になることで、土壌が失われ、水源かん養や土砂災害防止などの機能が低下してしまいます。

さらに、竹林を放置することで森林内に竹が侵入して増殖してしまう「竹害」も問題になっていきます。竹は繁殖力が強く、成長も早いので、太陽光が周囲の雑木に届かなくなり枯らしてしまいます。竹は草の仲間です。竹が比べて根を深く張らないため、竹が増えると森林の保水力が低下したり、根の浅い竹の地下茎によって土砂災害防止機能が低下したりしてしまいます。また、竹藪が広がることでイノシシなどに住みかを提供してしまうことになり、有害鳥獣の被害を呼ぶ原因となります。

これらのように、森林が荒廃してしまうと、森林が持つ多面的機能が低下し、私たちの暮らしにも悪影響が出てしまう恐れがあります。

**私有林の管理を自治体に 森林環境税の課税が始まる**

このような中、令和元年度に、森林整備などの新たな財源として「森林環境譲与税」が国から市町村に譲与され、自



# 人と自然をつなぐ 「山結び」

森を守る人々 Interview vol.2

NPO 法人 SOMA

瀬戸 昌宣 Masanori Seto



# 竹の「駆逐」から 竹の「活用」へ

森を守る人々 Interview vol.1

神興地域郷づくり推進協議会  
山下 敏治 Toshiharu Yamashita  
富松 享一 Kouichi Tomimatsu



## 地域振興の一端を担う「竹」 始めは厄介者だった

神興地域郷づくり推進協議会以下、神興郷づくりが主催する「竹灯まつり」の竹灯籠には「地域の竹」を使っています。地域振興の一端を担う「竹」ですが、神興郷づくりの富松享一会長と山下敏治環境景観部会長は「竹林を駆逐してしまおう」という思いから、竹林の整備を始めたと話します。神興地域の一角に竹林が生い茂り、そこにガスボンベや自転車などが不法投棄され、他にも大量のごみが捨てられたことがあります。また、他の場所では通学路が竹林になるなど、竹林が地域の厄介者となっていたのです。

## 高齢化などで放置される竹林 地域の財産が失われてしまう

竹林をなんとかしようと郷づくりが立ち上がり、数カ月かけて通学路はきれいに整備され、不法投棄された場所には、現在、桜を植えています。「竹は、伐採できたとしても

## 豊かな自然環境の再生 「山結び」とは

里山を豊かな自然環境に再生する「自然環境再生プロジェクト」が宮地岳で行われています。専門家・実践家と共に手を動かしながら、自然の見方、自然再生の手法を、実践を通して学ぶ「山結び」の活動を行っているのがNPO法人SOMAの代表理事、瀬戸昌宣さんです。3年前に福津市に移住し、令和5年4月から、これまで12回の山結びを開催してきました。

## 荒廃する山に抱く危機感 地域の人たちと共に守る

山結びを始める前、家族と宮地岳に登ったときに山が荒廃していることに気付いた瀬戸さん。宮地岳の山頂では、山肌が露出して土が固くなり、斜面も崩れていました。また、立ち枯れた木、中が空洞になっっている木があるなど、かなり荒廃が進んでいたのです。「このままではいけない」と危機感を抱き、地域の人た

大変なのは伐採後の竹をどうするか」と話す山下さん。長く伸びた竹

は山から運び出すだけでも一苦労です。山を個人で所有する人の高齢化などで、管理されずに放置されているところもあり、どうしても人手や労力が必要になることから、その整備を神興郷づくりが依頼されることもあります。

富松さんは「川や山、畑、自然豊かな景色は私たちにとって財産。跡継ぎがいなくなり、行く末はこの情景もなくなってしまうのでは」と危惧します。

## 竹を生かす「竹灯まつり」 楽しみながら竹林整備を

「竹林を駆逐するだけではなく竹を活用できないだろうか」と考えるようになった神興郷づくり。そこで「竹灯まつり」が始まりました。それから20年以上が経過し、公有地から取れる竹だけでは竹灯籠を作る大きな竹が足りません。そのため、管理に困っている私有地の竹林を整

ちと共に山を守ろうと山結びを始めました。

## 山頂周辺の環境を再生 参加者と共に解決策を模索

山結びでは、山頂周辺で作業を行い、外から資材を持ち込まずに、その場にある落ち葉や枝、石などを使って作業をしていきます。木の根を登山者が踏まないように石畳を作ったり、降った雨が一気に流れないように斜面に段差を作ったりするなどで、集まった参加者は作業に没頭。手を動かしながら解説を聞き、荒廃する山の課題を解決する最善の方法を模索していきます。

## 百年後に山を残すための 自然環境の自治

「山結びは、そもそも自然環境の自治ができるようになることが根っこにある。例えば、自宅の裏山が崩れたり、道路が地震で崩壊したとき、自分で修復できる方法を共に学び、土木作業は人手が必要なのでみんなで行う。大事な



備する代わりに竹をもらうことになりました。

その竹を使って、毎年夏に竹灯籠づくりの講習会を開催しています。これまでは工作をするだけでしたが、富松さんは「今後は竹を切って、乾燥させてといった流れと一緒にやって、興味を持ってもらうことも必要だと考えている。山の状況や持ち主が高齢化で困っていることを知ってもらうことで、みんなで整備していくことも考えていけない。その中で、タケノコを掘ったり、子どもが遊べる広場を作ったり、楽しみながら竹林整備ができれば」と地域ぐるみで景観を守っていきたくて話してくれました。

は、一緒にこの場所を作っていることと実感できることと、実践すること。あの山を作っているのは私達という人が福津に千人いたら、きつと福津の山の環境は良くなる。百年後により豊かな山を子どもたちに残すこと、自然が「ありがとう」と言ってくれるようにと、瀬戸さんは今日も人と山の縁を結び続けています。

# 森を守る人々

さまざまな恵みを与えてくれる森林。しかし、人々の「森離れ」が進み、森林の荒廃が進んでいます。市内には森林の本来の機能を取り戻すために活動を行っている人たちがいます。



# 地域の里山で 資源の 循環と活用を

森を守る人々 Interview vol.3  
ふくつ渡の里山プロジェクト

## 大学と市民から始まった 里山保全プロジェクト

福津市では2017年に、第2次福津市環境基本計画を策定し、共働による環境保全や環境づくりについての方向性を示しました。

「計画の策定だけでは福津の環境保全は進まず、行政や市民が実践につなげていくことが大事」。そう考えたのは、計画づくりに関わった九州工業大学の伊東啓太郎教授。同じく計画作りに関わり、津屋崎で暮らしと地域に根差した

不動産業を生業とする古橋範朗さん、伊東教授の研究室の学生だった長谷川逸人さんとともに大峰山の森づくりの話し合いが進みました。

大峰山の麓、渡地区で里山ワークショップを開催し、計画や調査で分かった大峰山の現状や課題を共有するなど、里山の保全や活動に関心のあ

## 資源循環を生み出す 竹林の管理と活用

大峰山には一部、人の手が加わっていない原生林もありますが、山林のほとんどは人が資源を利用するために維持・創出してきた里山林です。

中腹まで段々畑が作られ、森から薪や建材、農漁業の資材などを得ていました。人々が利用・管理していた森では、適度に木が間伐されて林内に十分な光が入り、多様な植物が生育しました。

しかし、今ではその利用が停止しています。人が使わなくなった森や段々畑では、竹や常緑樹ばかりになって森の中が暗く、限られた植物しか生育できません。健全な里山林を再生するには適度に手を加える必要があります。

そこでプロジェクトでは、大峰山の土地所有者から土地を借り、毎回10人ほどの参加者と、増えすぎた竹やマテバシイを間伐し、明るく、林床の植物が生えるような森づくりに取り組んでいます。竹林では、竹の本数を減らして、タケノコ栽培や景観・植物の再生

を観察するエリアや、竹林を切り拓いて広場にしているエリアもあります。森の中に光が入る空間をつくることで、本来そこに生えていた木や草を再生させ、多様な植物や生き物が生息できる環境づくりを目指しています。

プロジェクトの共同代表を務める角さんと長谷川さんは「竹炭は山や畑の土壌改善に使い、マテバシイを原木に、シイタケを栽培する。薪は活動を理解してくれる地域の人に販売し、残った灰も回収して畑にまいて活用している。これらの取り組みの中で、人が



①楽しく作業をしていると話すプロジェクトメンバー。左から古橋さん、角さん、長谷川さん、木村さん②薪の積み込み作業③かつて地域の人たちがつくった水路。今では石だけが残っていると話す長谷川さん④竹林で遊ぶ子どもたち⑤今後の展望を語る角さん⑥きれいに積み重ね乾燥中の薪⑦マテバシイに生えたシイタケ

## 必要だった組織づくりと 技術習得

プロジェクトでは、始動当初はポスターを作ってワークショップ形式で参加者を募り、活動していました。しかし、参加者はどうしても「客」として来ただけで終わりで、角さんは「作業が進んでいる感じがしなかった」と言います。

また、プロジェクトのメンバーは林業家ではありません。実験的にシイタケ栽培を始めるときは、斧おのとのこぎりこぎりで木を伐採するなど、試行錯誤しながら一歩ずつプロジェクトに必要なことは何か考え、実践していききました。その後、方向性を変え、人を呼び込むのではなく、チェーンソー技術や安全管理の仕組み、活動内容を考えたところ、安定した活動ができるようになりました。

## 次世代につながる 資源循環の再生を

各自が無理のない範囲で続けてきたこの活動はもうすぐ8年目を迎えます。長谷川さんは「建築の中に竹やマテバシイを使ったり、農業で竹炭を使ったり、学童の子どもたちの遊び場にしたり、メンバーそれぞれの仕事と重なりが出てきているのがうれしいし、里山の良い活用の仕方だ」と思う」と語ります。

再生には50年、百年とかかるかもしれないけれど、この活動を子どもたちが見て「大人たちが面白そうなことをしていてほしい。そんな願いを込めた活動は、活動そのものが集いの場を作り、次世代を育てるのです。

これから、さらに一反の畑を借り、そこに竹炭などの里山の資源を入れることで豊かな土壌が生まれ、その栄養が水路を通して津屋崎干潟に流れていく。里山の資源が循環し、異なる生態系の連続性が再生するように、これからもプロジェクトの活動は続いていきます。



# 未来に向けた 森づくりのために

長い年月をかけて育まれた緑豊かな森林は私たちの暮らしを支えるかけがえのない存在です。これからは森林を守り続けるためには、実際に森に入り森林整備の活動に取り組む人に協力するだけでなく、さまざまな取り組みを行っていくことが必要です。

このような状況の中、森林の多面的機能が後世にわたって発揮できるよう、国が創設した制度が「森林環境税」です。これは地球温暖化や災害の防止などを図るために、森林整備に必要な財源を国民一人一人が等しく負担して森林を支えるという観点から課税されることが決まりました。令和6年度から個人住民税均等割と併せて、国税として年額千円を市町村が徴収することとなります。

また、国に一度集められた森林環境税をもとに、市区町村と都道府県に再配分するものが「森林環境譲与税」です。国として大きな課題である森林整備を促進するために、森林環境税の課税に先行して、令和元年度から前倒しで各自治体に譲与され活用されています。市でも森林環境譲与税を活用して、間伐などの森林整備の実施などを行います。また、関係機関や団体のかたがたとも連携を図り、森林づくりを進めていきます。

今回の特集で森林や樹木について興味・関心を持ち、未来に向けた森づくりのために一人一人が「自分たちに何ができるか」を考え、所有している森林の活用方法などを家族や友人

と話し合うきっかけになれば幸いです。

◀市農林水産課  
城野努課長



# 次世代に つなぎたい 山と海の つながり

森を守る人々 Interview vol.4

伊東 啓太郎 Keitaro Ito

国立大学法人九州工業大学 大学院 教授  
日本景観生態学会会長

## 福津市の自然環境の現状

福津市には、里山や干潟、海岸の松林など、素晴らしい自然の姿が残されています。松林や上西郷川など、地域の人々の長年の取り組みで自然の姿が再生され、景観が保たれている地域があります。その一方で、放置された森林に竹が侵入して劣化が進んでいるところもあり、残念ながら健全な自然の姿ではなくなっている場所が増えています。福津市の森の多くは、人が炭や薪を得るために管理されてきました。人が山に入ると利用・管理することで山の機能が保全され、人々の暮らし

しとつながっていたため、山は昔、子どもたちが家の手伝いをしたり、遊んだりする環境でもありました。しかし、燃料が薪から石炭に、その後電気やガスに代わり、農漁業具などでもプラスチック製品が増えたことなどで、森林の資源を利用することが大きく減少していきました。今、福津の里山の多くは、人が使わなくなり放置されたため、とても暗い森になっていきます。さらに竹林の拡大で他の植物が健全に育つことができず、土壌環境も荒廃してきています。このような森では、再び適切な管理や利用について将来の方針を決めて取り組んで行く必要があります。

## つながり合っている 山と海の環境

山と海には、さまざまなつながりがあります。津屋崎干潟に隣接する森に生息するアカテガニは、産卵のときに海に移動するため、干潟周辺の路上で多くの死骸を見掛けます。

また、福津の森林環境は、海や干潟への栄養供給という点でも、とても重要な役割を果たしています。しかし、森と干潟が道路などで分断されていることで、山からの土砂や栄養が届きにくくなります。これらのことは、干潟のアサリやカキの成長・繁殖への影響、藻場が減少することにつなが

## 地域本来の森林の姿を 再生するために

本来の地域の里山や海岸の森などを守っていくときに、20年や50年、さらに先を見据えて考えていくことが重要です。未

来に向けた森づくりには、良い森づくりを続けたいという思いと、知識や技術が必要になってきます。地域本来の自然の姿と人々の暮らしに合わせながら、森の手入れを行っていくことが大切です。例えば、福津市第2次環境基本計画の実践をしている「ふくつ渡の里山プロジェクト」では、かつて燃料として使われていたマテバシイを活用し、シイタケづくりに活用することを提案しました。その後、シイタケ栽培用の木の間伐で森が明るくなり、おいしいシイタケが食べられるという森林の資源を恵みとして受け取りながら管理する仕組み

ができています。また、ノルウェーの人々は、森に入って自然の恵みを受け取り、森が荒廃しないよう管理しています。ノルウェーでは、このような自然の恵みを受け取る仕組みを「万人権」と呼んでいて、重要な法律として自然保護に生かされています。福津市でも、明るい森林を再生することで人々が森に入りやすくなり、本来その土地に生育している植物が生育し、土壌環境も保たれるようになります。その際、環境の変化を見ながら、森を育てていくことが大切になってきます。このように、森を賢く使いながら守り育てていくことが重要です。

## 20年後も森や海の恵みを いただけるように

津屋崎の知り合いのかたに子どもの頃の話を知ると「山でミソツチヨをよく食べるとソツチヨとは、シャシャンボという木の果実のことです、この話からも昔の福津の森の姿と子どもたちの良い関係を伺い知ることができます。子どもたちが山に入って「楽しい」と思えるような場所にしていくことで福津の森づくりはさらに良くなっていくのではないのでしょうか。子どもたちが山に入り、さ

まざまな経験をして、数十年後大人になったときに、この地域の良さを実感できるように、これから地域で育っていく子どもたちが、継続して福津の山や海の恵みを食べられるように、森や海の環境を考えていきます。福津の山や森は本来どんな森なのか、本来の自然の姿について調べ、楽しみながらできる森づくりを進めてゆく。かつてそれぞれ地域や森で当たり前であった暮らしとのつながり。はじめは小さくても、それぞれの地域で実践していくことで、次第に大きく福津全体の環境づくりにつながっていくのだと思います。

